



『くブラッシュアップ助産学』

正常分娩の助産術

トラブルへの対応と会陰裂傷縫合』

評者・毛利 多恵子 毛利助産所

長年産科医として臨床をされ、多くの助産師とともに協働されてきた進医師ならではの視点と、助産実践に根ざした研究指導をされてきた助産師・堀内氏の両者による正常出産に関する本がついに発行された。

第1章は、正常出産とは何か、正常出産の要である「お産のホルモン」を理解することからはじまる。生理的なお産のしくみをホルモンの働きから理解し、そのホルモンをうまく働かせるために、どのような助産ケアが効果的なかが述べられている。

第2章では、助産師が自立し正常出産を担う上で必ず出会う、正常経過を逸脱しそうになるグレイゾーンや遷延分娩、微弱陣痛、破水と羊水混濁、過期産についても、産科学的な母児管理と助産ケアが、具体的に提示されている。出産中の女性がどのような自己管理ができるか、産婦に直接語りかける形で紹介されていることもユニークな点である。どのような分娩経過になっても、その女性にとって一生の思い出となるような出産経験を支援することが重視されている。

第3章では、会陰裂傷予防の会陰保護とともに、自然にできた裂傷に対する会陰縫合についても解剖生理の理解から縫合の技術まで記載されている。かつて会陰切開と会陰縫合に関する専門書の著者であった進医師が、あえて助産師

助産と産科がドッキングした、お産教本



進 純郎・堀内 成子 著
定価 3150 円(本体 3000 円+税 5%)
B5 判/医学書院/2010 年

が縫合を学ぶ上で必要な知識と技術を提供されている。

院内助産で助産師が行なう分娩症例をそばで見ておられた結果、自然にできた会陰裂傷は二度以内であり、動脈、静脈、神経が切断されないこと、会陰切開と自然にできた会陰裂傷の予後と比較しても、自然な会陰裂傷の予後のほうが疼痛と腫脹も少ないことが示されている。

共著者である堀内氏は、「助産師は、正常分娩の生理、とくにホルモンを味方につけて生理的なメカニズムを発露させるケアを実践することが自立する上で必要だ」と述べている。また

進医師は、助産師のケアによりスムーズなお産の進行を促進させること、会陰保護により会陰裂傷を予防すること、裂傷が起きたら助産師自ら縫合できる技を身につけておくことを目的に本書を作成したという。

臨床実践している助産師なら「なるほど」と思わずうなずいてしまう、示唆に富んだお産教本といえる。この本は、とくに実践をされている助産師にとって、自らの助産実践の臨床経験を意味づけたり見直したりできるのではないだろうか？ また助産学生にとっては、産科や助産の知識を臨床場面で統合することにつながるのではないだろうか？

ついに、助産と産科がドッキングした正常出産の教科書が生まれたといえよう。